

淀君と三成
（墓）

人物

お茶々 (後に淀君)

お發 (其妹)

石田治部少輔三成

織田上野介信包 (御茶々等の叔父)

織田三十郎信重 (其長子)

松雪尼

小川平左衛門 (石田の家臣)

侍女四人

石田の家臣大勢

時 天正十七年九月朔日

處 伊勢阿濃津、織田信包が城内の庭園

勢州阿濃津、織田上野介が城内の庭園

（舞臺稍下手寄りに松の大樹、枝は舞臺一杯にのびて、それにまつはる蔭は、霜こそ帯びね、稍色づきて、風情ことに面白し。松より下手には幅一間ほどの小川、その上に赤き擬寶珠づきの欄干ある橋を架く。その岸に一本の梧桐。正面の背景は、木立を通して贅崎の海を見るこゝろ。下手は橋を越えて、浅井備前守長政が遺愛の息女お茶々その他の居間の一部を示す。松の下には毛氈を敷きて、松に近く風爐其他の茶器を置き、長政の長女お茶々、茶を點て終り、茶碗を洗き居る心。上手の方には尼僧松雪、お茶々の妹お發の兩人坐り居る。いづれも一種の暗雲に鎖されて、顔を擡ぐる力さへなし。此人間の苦惱を嘲けるが如く、秋の色鳥樂しげに樹間に囁り居る。

幕明くと一同しばらく無言。松雪尼まづ口を開く。）

松雪尼

只今拜見致しましたその茶入と云ひ、そのお釜と云ひ、此尼には如何やら見覚えの有る様に存じられまするが。

お茶々

左様もあらう。この品々は妾たちが二度目の父と頼んだ柴田どのが遺愛の茶器ぢや。

松雪尼

それなれば、若しやあの大國の茶入れと……

お茶々

左様ぢや。釜は姥口ぢや。

松雪尼

併しその二品は、北の庄御落城の折、中村文荷齋が拜領致しましたのを、冥土の御供致す身には

不要な品と、柱に打あて微塵に碎きましたやに承はつて居りまするが。

お茶々

その折は、妹たちもわらはも、賺す様に和められて、落延びた後の事故、人傳てに左様聞いては居たなれど、まことは其時筒井順慶の使者に來た島左近とやらへ、柴田殿から贈られたを、その後左近が主取りした石田治部少輔といふものより、叔父上へ贈つてくれた亡き父上の遺愛の品、母上も折々は手をかけ賜ふたと思ふにつけ、懷しうてならぬのぢや。

松雪尼

わたくしも久振にて御兩方に、おめもじ致す心地して、有りし昔がおもひ出でられてなりませぬ。(指を折つて)あの折は嬢君にはお十三、(お發に向ひ)あなたさまにはお十一、ほんに恐ろしい事でござりましたな。

お發

そなたに手をひかれ、姉上とたつた三人、城門の外にのがれ出たあの時の悲しさ怖さ、今見る様にありくと、此兩の目に焼きつけられては居るもの、わたしの稚い心には、この様な品々は少しも残つて居らぬのぢや。

松雪尼

あの折は相手が名にし負ふ、秀吉どのでござります故、どの様な事にならうかと、この婆も大概案じた事ではござりませなんだ。したがあの豊臣といふおひとは、あなた方とは前生から仇敵どしでがなござりませうか。生みの父御さま、育ての父上、お母さままで、あの人の爲めに無念の御最期……

お發

ば、そればかりか、今度は姉上を欲しいといふて無態の戀慕ぢや。

松雪尼

ほんに其御話は、先程上野介さま御親子からうかゞひました。なんほ御運が拙なればとて、あなた様は誰あらう、江州小谷の城主浅井備前守長政公の御息女、故右大臣信長公には御姪御、あの様な成上りの……(云ひさして先刻織田上野介より注意されし事を思ひ出し)併し以前は以前、相手はもう關白といふ貴い身分、御我慢のなる事なら、御不承遊ばすがよろしうござりませう。

お茶々

(屹となつて)ばゞ、世は如何に澹季になつたればとて、そちまで其様な賤しい心はあるまいと思ふたに、その様な事を恥かしうも無う云ふ口で、能う亡き父上の御位牌にお經を讀んだな。あゝ、浅ましい人心ぢや。

松雪尼

(涙に咽び)お心に障られたに御無理は無い。したが第一はあなたの御身の上、御姉妹や上野介さま御親子の御迷惑、それがお氣の毒で胸がつぶれ、とんだ心にもない事を申しました。頭くちに對しても面目ない、おゆるされて下さりませ。

お茶々

それは妾とても思はぬではなけれども、あの草履つかみの猿面めには……

松雪尼

稚い時から氣位の高い姫君様、左様思召すも御道理でござります。

お茶々

それについて、ばゞ、少し聞きたい事がある。そちは母上が小谷にお出で遊ばす時から、おつき申して居たといふ事であつたな。

松雪尼

左様でござりまする。わたくしの父は鶴松太夫といふ能の役者、あなた方にはお祖父様、下野守

久政公の御最負うけ、御自害の折には御介錯を申上げたほどの身の上、わたくしも小谷落城には、御母さまや、姫君のお手をひき、まだ當歳のお發さまを背に負ひ、信長公の御陣所へまるつたのでござりました。

お茶々
それならば、母上とは同胞の織田どのと、父上とが何故にお仲違ひになられたか、そのわけを知つてゝあらうな。

松雪尼
それは長政公といふあなたのお父さまが、今の世に珍しい義の堅いお方で、信長公が豫ての約束を反古に遊ばし、越前の朝倉どのを攻められたを氣の毒に思ひ召され、義理ある兄弟仲も顧みられず、御加勢なされた爲めでござりまする。

お茶々
その様な表面おもての事は妾も聞いて知つて居る。併し御二人の仲がその様な事になつたについては、外に何ぞ仔細があらう。これを聞かせて欲しいのぢや。

松雪尼
（稍當惑する聲にて）いえ／＼その外には何の理由もござりますまい。

お茶々
無いとは云はさぬ。そちは今、生みの父上が無念の最期を遂けられたも、あの豊臣めが爲めぢやといふたな。

松雪尼
えい。

お茶々
妾は今日まで妹たちにさへ打明けなんだが、折々妙な夢を見る事がある。それは恰度北の庄落城

の前の夜と同じ景色ぢやが、その中に出る人たちは母上の外はみな違ふ。かすかに目の先に残つて居る父上とも覺しいお方が、いつも妾を手招きされて、「猿めを忘れな、猿めを恨め」と、それはそれは怖ろしいお顔を遊ばすのぢや。昨夕も叔父上や叔母上から、一家の浮沈、妹たちの身の大事と、さまざまに搔口説かれて心も弱り、いつそ此身を犠牲にと、思ひかけてまどろむ中、又同じ夢におそはれたが、「猿を恨め」と云はれた其お聲の物凄さ、その悲しけなお顔の怖しさ、まだまざく目に残り心に残る。そちの先刻の語を思ひ合はすれば、父上の仇敵は豊臣めに相違あるまい。さば、頼む。その時の一部一什、どうぞ打明けて聽かせてくりや。

松雪尼

その時は今の關白殿下も木下藤吉郎といふ信長公の侍大將、それ程の御器量はござりませなんだ。若しわたくしがその様な事申しましたら、ほんの一時の云ひ損じ、御氣に止められぬ様に願ひます。

お茶々

左様か、そちはそれほどに云ひたうないか。叔父上や、信重殿も、その事になれば秘しがくしに包んで居られる。それだけに聞きたうは思へども、云はぬものから強ては聞くまい。(つと身を起し、下手橋の方へ行き、欄干によりかゝりながら吐息して) いづれにして呪はれて居る此からだ、仇であらうと、敵であらうと、行きさへせねばそれまでぢや。

(松雪尼あとを追ふ様にして)

松雪尼

でもその爲めに、御一族に禍殃がかゝりましたら……

お茶々

それを思へば此胸に焼鍊をあてられる思ひもすれど、さりとて夢の中の父上のあのお語と云ひ、

そちの今の話が定ならば、あの豊臣は重なる仇……

松雪尼

(傍へより袖をひかへ)これ、御聲が高い。その様な事は口にはおろか、心にも御浮め遊ばすな。梧桐の葉影に覆はれて居る今の世の中……

梧桐の葉影に覆はれて居る今の世の中……

(風の音、岸邊の梧桐はら／＼と散り、橋の下をくゞつて、お茶々の目前を流れ去る。)

お茶々

縁にはこりし其桐も、秋風吹けば散り初むる。あれ／＼行衛も知れず流れて行く。

(じつと水面を見つめ居りしが、やがて愀然として)

お茶々

なまじ人にすぐれた、此面があればこそ、秀吉づれに淺ましい、無態の懸想もせられるのぢや。

えゝ、此雪の肌がうらめしい、此黒髪が腹立しい。

(悲しげに見まはす中、風爐の火が目に入りしか、づか／＼とそばに來り、矢筈に矢箸を火の中に差込み頬に

あてんとする。お發は驚いて、姉の手にすがりつく。)

お發

姉上には何としてその様な……お心ばし狂はれてか。

お茶々

いや／＼如何なる變目のつもればとて、心の狂ふやうなわらはでは無い。たゞこの面を焼けたゝらせ、われから秀吉がもとへ推かけて、あの色好みの浮かれ男の、驚く顔が見てやりたい。

お 發

それぢやといふて、此様な玉のお顔をきづけるは、あまりといへば可憐らしい。

(松雪尼はおどくして、橋の近くにありしが、深ながら其前に打伏し)

松雪尼

何をおかくし申しませう。このばゞも上野介様御親子の御頼み受け、出来るものなら豊臣家へお興入のあるやうにと、思ふては見ましたれど、それまで堅い御決心、却つてこの身が耻かしい。それならば姫君さま、我が田へ水を引くやうなれど、いつそ其黒髪を御絶ち遊ばし、此世を御棄てなされては如何でござりまする。

お茶々

それも此程より思ふては居たなれど、浮世を外に行ひ澄して居られた冷泉家の姫君をさへ還俗させて、色慾の犠牲としたといふあの秀吉、左様なつたらいよく此身の耻辱と思ふて……

松雪尼

さういふ御心配がござりますなら、わたくしが何處までもお伴して、世界の果へも隠れませう。

お茶々

よう云ふて賜つた。幸ひ今日は亡き父上の祥月命日、その靈前で佛の道へ……

お 發

(思ひ入つて) 姉さまが其御心なら、妾も一緒に浮世を棄て、いつこへなりとお伴がしたい。妾には此淺ましい世の様がとうから忌でならなんだ。

お茶々

これはしたり、そなたには罪もむくいもない世の中、勝手なことをいふ様なれど、後へ残つて叔父上の育ての恩をお酬い申し、相應しい縁があつたなら、何處へなりと縁組して、細々ながら浅井の家名を立て、下され。

お發

いや／＼、世に恐ろしい生死の境を、二度までもくぐりながら、姉妹二人つい一度、手をはなした事もなかつたに、今更姉上に別れたら、妾は明日から何とならう。死ぬも生きるも一緒にと、いつかも誓ふた事がある。死んでもお側は離れませぬ。

お茶々

成程左様であつた、たゞ一向にそなたの身をばかば、ふと思ふた爲め、誓ふた語も忘れて居た。野分にまざる浮世の風に、吹さいなまれて枯れやうより、どうで運拙なう生れた姉妹、なまじ盛りの春を知らで、此世をおくるが身の幸福であらうも知れぬ。ば、そんなら妾の居間へ行て……

松雪尼

是非ない事でござりまする。

(一同身を起すと、下手より侍女(乙)入り來り、松雪尼に向ひ)

侍女(乙)

庵主さまへ申上げます。

松雪尼

何事でござりまするな。

侍女(乙)

四天王寺の大般若の時が迫りました故、早うお出でが願ひたいと、お迎へにござりまする。

松雪尼

お、姫君たちの事のみに心が塞がり、大事の約束を忘れて退けた。それならば姫君さま、四天王寺よりの歸途……(日脚を見て)日暮れぬ中に参じませう。

お茶々

待つて居るぞや。

(松雪尼挨拶して下手へ立去る。女中送つて行かんとするを呼びとどめて)

お茶々　　ばゞを送つて行たり、三四人でこゝへ来て、此御茶の道具をしゝふて呉りや。
侍女(一)　　畏りました。

(下手へ去る。あとにて二人は愁然として茶の道具を形づけ初める。よき程に女中たち來りて、器物を下手橋の向ふに持去る。茶入と釜とは特にお發に注意して持去らせる事などあり、お茶々も最後に茶巾を懐ろにして立去らんとする時、下手橋のあなたより織田上野介信包と其伴三十郎信重出來る。)

お茶々　　叔父上や信重さまには、何れへお出でなされます。

信包　　どこへ行かう、そなたに逢ひたうてこゝへ來たのぢや。

お茶々　　何の御用で。

信重　　そなたの嫌ひな、又例の話ぢや。

お茶々　　(思入れあつて) それならば、いく度伺ふても詮の無い事、御免なされて下さりませ。

(橋を渡りて立ち去らんとす。信包袖をひかえ)

信包　　そなたも聞くはつらいであらう。われらとて語るは心苦しい。然りながら秀吉公より再三の御使

者、その度毎に數ならぬ此信包に不相應なる恩賞、織田の一族次第に凋落し行く此節がらに似もやらず、近くば從三位に敍せられ、左近衛中將に任ぜられた。それもこれもそなたを手に入れたさの關白殿下の御追従、老朽の身の信包には、冥加過ぎて勿體ない。

信 重

それ程の御恩を蒙りながら、此程よりの云ひたい三昧、此上否やを申したら、退引させず此阿濃津の城も召上げられ、織田の家も取挫がうといふ恐ろしい嚴命ぢや。

お茶々

誰がその様な事を申しました。

信 包

また、使者が見えたのぢや。

お茶々

して、その使者といふは？

信 包

當時出頭第一の石田治部少輔ぢや。

信 重

それ／＼、あの姥口の釜と大國の茶入とを贈つて下された親切なお方ぢや。

お茶々

治部少輔といふは、豊臣の家中にても才智すぐれた利者にて、五奉行の一人と聞きましたが、戀の使ひをする様な意氣地なしでござりまするか。

信 包

これ／＼その様に聲高には申さぬものぢや。向ふの書院でわれらの挨拶を待ち受けて居られるのぢや。

信 重

（聲を潜め）彼人の心に障るは、關白殿下の御心に障るも同然と、諸大名さへ憚かる威勢、あの人の使者に立たれたがわが家の不運、今は早や絶體絶命、茶々どの、何も申さぬ、たゞ承引が願ひたい。

（信重は手をついて頼む。お茶々は烈しく煩悶、やがて亡き父の幻影目の先へちらつくに、心を取直して）

お茶々

これ迄の御養育の御恩に對しても、快うお受をせねばなりませぬが、女子の身には義理にも情けにも易へまじい大事の操、心にもない男には賣られませぬ。頑な姪をもたれた御身の不幸と、お諦めを願ひまする。

信 包

そりや、如何あつてもわれらの頼みを……

信 重

聞入れては下らぬな。

お茶々

お赦しなされて下さりませ。

信 包

此上は是非がない。

(信包差添を抜き腹をきらんとする。お茶々は目を瞑ちたまゝ止めんとせず。信重は慌てゝ其手を抑へ)

信 重

父上には御心が狂はれたか。お茶々どの承引なき上は、兎ても角てもまぬがれ難き我家の非運、

此上はたゞ尋常に關白殿下の御仕置を待つまでの事、立騒いでは見苦しうござりまする。

信 包

とはいへ、見すゝ此家を取つぶされ、剩さへ落首などの浮目に逢はうより……

お茶々

(決心を面に現はし) その治部少輔とやりに逢ひませう。

兩 人

えゝ。

お茶々

秀吉の腰巾着、此頃流行る貢茶では無けれども、一を聞いて十を知る程の才子とやら、少しは話も分るであらう。あなた方の御迷惑にならぬ様、なんどり話をしませう程に、どうぞ逢はせて下さ

りませ。

信 包

併しその様な勢ひで、あの使者を怒らせたら……

お茶々

その様な御心づかひには及びませぬ、屹度首尾よう爲ます程に、是非お逢はせ下さりませ。

信 包

さらば、兎も角も逢ふて見やれ。われらは先へ行て、石田殿に程よういふて置かう。衣服を換へて書院へ直ぐに。

お茶々

いや／＼、これへ御呼び下さりませ。

信 重

それにしても相手は治部少輔、殊に關白殿下の御使を……

お茶々

彼方よりの願ひ、庭面はおろか、門外にても故障はない筈。

信 包

如斯云ひ出したら、誰がいふ事も耳へ入らぬ此茶々殿、そんならそなた迎へに行て……

お茶々

わらは一人で逢ひたうござりまする。御兩方はあちらへ行て。

信 包

さりながら萬一無禮の事でもあつては……

お茶々

あなた方へ御迷惑は屹度かゝらぬ様に致しまする。さあ、これへ御遣はしを願ひまする。

(兩人詮方なく下手へ去る。蝴蝶一つお茶々の周圍をめぐる。お茶々之を追ふて橋の上へ行く。三成下手より来る。お茶々心つかざる如く、蝶を追ふまねして三成の顔のあたりを煽ぐ。やがてわざと驚きたるまねして)

お茶々

これは龜忽ぢや、許してたも。

三成

(同じく橋の上にて) これは姫君でござりましたか。それがしこそきつい御無禮。

(懇懇に挨拶する。お茶々橋の欄干に腰打かけ)

お茶々

茶坊主上りの三成とはそなたか。

三成

(悪怯れたる顔もせず) 身を匹夫に起せしそれがし、當時を御承知これあるとは此身に取つて本懐至極。

お茶々

そなたは秀吉どのに三杯の湯を薦めて、とう／＼今日の身の上になつたと聞いたが、それが定なら、不思議な出世の仕方もあるものぢやな。

三成

如何にもそれがし十歳の折から、江州石田村なる眞言寺にて、わが君の御目にとまり、引つゞき今日まで山海の御恩を蒙つて居ります。

お茶々

それ故佐和山十九萬石を領しながら、はしためなどに相應はしい戀の使ひもしやるのぢやな。

三成

仰せまでも候はず、一身を鷲毛に比し、君のためには如何なる勤務も厭はぬ微衷、事の大小輕重など素より差別はござりませぬ。

お茶々

心憎い申し様ぢや。是までの使ひは兩度ともに、生溫い素湯の様なもの、みで有つたが、そちは少しは人の舌をさす様な熱度をもつて居やるの。

三成

溫熱さま／＼の御湯を獻じて、わが君の御寵愛を得てより、はや二十年、三成の頭腦もいかう鈍

う相成りました。が、此度の使ひは、たゞわが君が姫君に對する御執心の程を申上るが眼目、小田原の北條を除くの外は、一天四海を片手に掌握し給ふわが君も、戀には上下の隔てなく、たゞ一向に姫君に憧がれて、寢食をだに安んじ給はぬいちらしさ。見るに見かねて此三成、われから使者の役目を承はり、これまで推參致しました。あはれ願はくばわが君の真心をお汲みあつて……

お茶々

（哄然として笑ひ出し）あは、は。三成とやら、そちはもう少し賢い男かと思ふたに、噂ほどでも無い鈍い阿郎ぢやな。何の、あの秀吉にまことの戀があるものぞ。虎狼が腐つた肉を漁る様に、女の操を破る外には愛も情けも知らぬ秀吉、その様な白々しい取なし口を利いたとて、誰がまことにするものぞ。

三成

これまでの浮いたる戀は兎も角も、姫君に對しては、ありし昔の若々しきみこゝろに立還られ……能う恥かしうもない其眞顔、したが縱令それを眞實としても、妾は贈正三位右大臣織田信長公の姪ぢや。草履つかみの成上り、あの猿面冠者の側室などに……

お茶々

三成

昔の素情を云はうならば、松丸どのは京極宰相高次公の御妹にて、京極家こそは姫君の御父君淺井備前守が御主筋……

お茶々

（ちよつと困惑して）他はともあれ、此茶々はあの秀吉は大嫌ひぢや。

三成

動かし難きは人の心、お嫌ひとあつては是非なけれど、思へば思はるゝもまた人の心、落花心あ

れば流るゝ水にも情はある筈……（不圖思ひついたる體にて松にからめる葛をじつと眺め）姫君、あの姫葛をば何と御覽ぜらるゝ？

お茶々

此姫葛が、（少し考へて）如何したといふのぢや。

三 成

この姫葛は其名に因む即ち女性、便る男の松が枝なくば、如何に青雲の志ありとも、大地をのたうち廻るが究竟の命運、されど一旦かゝる大樹にまつはる時は、春の緑り、秋の紅る、多くの人に賞でられもし、仰がれも致しまする。今は早、昔の意地を伊勢の海にさらりと棄てられ、天にもとどく人臣の極み、關白殿下に便られなば、まづ此葛の如くにて、あらゆる天下の人々を見下し給ふも容易い事。

お茶々

いや／＼妾は人に便る蔓かづらにはなりたうない。姫葛の、よし、その蔓はかよわくとも、空をば凌ぐ大樹をさへ支へる力になりたいのぢや。

三 成

と、仰せられまするは？

お茶々

男の作つた高樓の上にわが物顔にすわるは忌ぢや。男を助けてもるともに、天下を見おろす高樓が作つて見たい。

三 成

（深く感じ入りし體にて）誠にわが君の御氣象を、二つに分ちし如き御活達、畏れながら如何にも似合はしき御伉儷、姫君にして御入興あり、君の御輔佐をなされんには、世界一統の御大望もいかで

か成就せざるべき。

お茶々 世界一統の大望とは？

三成

これぞわが君が一兩年前より、ひそかに思し立たせられし回天の大事業、まづ三韓を打靡け、大明までも手に入れて、おのれは其皇帝となり給はん御思し立ち。さりながら、る大事業は、帷幄の裡に内助の女性が最も肝要、唐土にては漢の呂后、わが朝にては尼將軍、それにもまさる烈女もがなと、探ねもとむるわが君の目鏡にかなひしおん姫君、蝸牛の角の上なる争ひは、全く思ひ忘られて、世界の妃となり給はむ御心はござりませぬか。

お茶々

天つ御神の仰せなりとも、人の側室になるやうな妾では無い。秀吉まことに此身を思はゞ、北の政所といふ田舎者が今の身分を追ひ退けたその上にて、妾を迎ふるが道では無いか。まづそれまでは聞くも煩さい、語るも無益ぢや。

三成

北の政所は御身分こそ賤しけれ、わが君とは三十餘年の御語りひ、それを動かさんなどゝは、木に縁り魚を求むる譬喩、さりながら政所にも、其他にも、御胤さへもなき今の有様、若君一人有給はむ御方こそは、やんがて双手に此世界を掌握し給はむ御運勢。

お茶々

さりながら秀吉どのには秀次といふ養子もあれば……

三成

表晴れては申されねど、右大臣家の行末は、その放埒の御處業にて大抵見据えはつき申した。さ

れば遠からずわが君の御胤と生れ給はん御方こそは、誠に大千世界を知ろしめす果報の君王。

(お茶々は目前につきつけられたる虚栄の爲めに、心も眩むばかりに動搖し初む。)

お茶々 そんなら世界を此細腕に……

三成 (嬉しげに) さらばそれがしの語をお用ひあつて……

(風の音、日光稍暮し、お茶々は又幻影の父の語を聞く心、忽ち顔色變り、われにも非ず口を洩るゝ鋭き語。)

お茶々 「猿めを忘れな、猿めを恨め。」

三成 (驚いて) やゝ。この御有様は。

お茶々 あの秀吉は此身の仇敵、父母の仇ぢや。眞實まことにもならぬ榮華の語に、片時たりとも、此心を亂し

たのが恥かしい。三成、そちが何といふても、妾の心はもう動かぬ。餘計な舌を動かさうより、早うこゝを立去らうぞ。

三成 強てとの仰せなれば是非なけれど、關白殿下を御兩親の仇敵と仰せらるゝは、三成近頃不思議に存じ申す。

お茶々 又してもぬけ／＼とした其眞顔、いくら頭腦が鈍うなつても忘れやうはない筈ぢや、今より丁度七年前、二度の父と仰いだる柴田修理進勝家どのは、生みの母上小谷の方と諸共に、秀吉の爲めに北の庄の城を圍まれて、無念の最後を遂けられた。

三 成 それを怨ませらるゝは、ちと御無態かと存じられます。

お茶々 何、何故？

三 成 故柴田どのは、わが君が藤吉郎の昔より、高義を受けし大事の恩人、決して疎略のお思召はなかりしに、勝家どのこそいはれもなき嫉妬偏執、無名の戦さを挑まれて、却つて武運をせばめられ、

悲しき最期を遂げられ申した。その最後の際にさへ、わが君には懇ろに、勝家どのに降参を勧められ、北の方にも御助命の御沙汰はあつたれど、御兩方共御用ひなく、思ひし効も夏の夜の夢路はかなき郭公と、辭世のお歌を残されて、強てあの世へ打ち連れられた。其上わが君に於いて、御一家に對して何の宿意もなき事は、姫君はじめ御姉妹の方々を、恙がなく御助け申し、當館に御渡しありしが、何よりの證據、それらこれらを御熟慮あらば、君に對する御疑ひは春の氷と釋くべき筈。いやゝ、妾の疑ひはその一事許りで無い。生みの父上淺井備前守の滅亡も、彼の秀吉めが、反間苦肉の犠牲ぢや。

お茶々

三 成 (わざと大きく驚き) 姫君にはその祕密をまで御存じありしか。(烈しく感慨に沈みし體にて) ふむ。それを御承知ある上は、如何つくらふてもせんなき事ぢや。(獨語のやうに云ふ。)

お茶々

(じつと思入あつて) そんならそなたも當時の事を……

三 成 御存じとある上は隠しても詮ない事、いづれは豊臣家へ御輿入あつて、打釋けたる御語らひのあ

るべき御身の上、互ひに祕密の魂膽あつては、却つて後日の齟齬の種……けにそれこそは天正元年九月の朔日、信長公の先手を承はつたる木下藤吉郎秀吉公、八千餘騎の手勢を引連れ、京極太の切處に登り、御祖父君久政公が守られし小谷の城の二の丸と、御父上長政公の本丸との間を立切り、揉みに揉んで攻め立てたり。

お茶々

ふむ、して祖父上は何となされた。

三成

秀吉公の謀計にて、磯部丹波守を初めとし、三田村、大野木、善祥房、日根野が如き客分まで、みな浅井家に裏切りさせたる後の事とて、城内の人数至つて少なく、忠義に心は逸れども、わが君の鋭き鋒先さ、へん様なく、あはれや下野守久政公、行年こゝに六十一歳、腹かき切つて死し給ふ。

お茶々

して／＼父上の長政公には？

三成

さすがに信長公には妹婿、殊には世に比較なき長政公の忠勇義烈、敵とはいへど、やみ／＼と討死させんは口惜しと、不破河内守を以て降参の儀を勧められしに、父上にも承引あり、既に和平と見えし時、我君には何故にか、信長公の下知に負き、無二無三に攻め入つたり。

お茶々

なに、あの秀吉が理不盡に。

三成

長政公も今は是非なく、御母上のお市の方と、姫君やお妹御を信長の陣所へおくられ、その身は

程なく御自害ありしが、「恨めしきは猿面冠者、憎くきは木下」と、最後の呼吸にて云ひ残され、二十九歳を一期として、花々しき最期を御遂けありしと承はる。

お茶々 さてこそ思ひ當つた幻影まぼろしの御言、「猿めを恨め」の御一言こそ、二十年以前の今月今宵、此世に残せし父上の御遺言。

三成 まだそれのみかはわが君には、長政公の御嫡子——姫君には一人の兄君、萬福丸と仰せられし、いたいけ盛りの若君を江州木の下にて探出され、聞くも恐ろしき串刺の仕置にかけしと當時の噂。そりや頑是ない兄上まで、えゝ、ようもく／＼酷たらしう殺したな。おのれ、殘忍非道の猿男め、いで此の上は京洛へ赴き、兄の怨み、母の仇、父上が最後の一念、晴さいで置くべきか。

（お茶々物狂ほしき形相となり、下手の方へ走り出でんとす。三成驚きたる容子にて）

三成 子心にも餘りの無残と、肺腑に徹せる當時の思ひ出、われにも非ずうか／＼と、云ふまじき事までいふて退けた。さりながらこれも二昔に近き昔の夢、今は早や御諦めこそ御身のおためと存じまする。

お茶々 聴かぬ中は兎も角も、如斯知つた上から、聚樂とやらへ赴いて、重なる恨みを晴すのぢや。

三成 （哄然と笑ひ）女性に似氣なき御聰明と、噂にも承はり、先程よりの御對談に、いよく感じ入りたりしが、初めには似ぬ不覺な御語。

お茶々 何と。

三成 秀吉公こそは關白太政大臣、勇將猛士御前を警護し、范噲孟獲此世に出づとも、指一本もさゝせ

まじき御威勢、姫君一人御出であるとも、忽ち警固の武士に捕へられ、一言のお怨も、わが君の御耳には達せずして、空しく刑場の露と消え給はむ。

お茶々 やつ。

三成 誰憚らずわが君に逢はせらるべき機會の有るを、われから強ひて打棄てゝ、危うき橋を渡らんとは、姫君、心ばし狂はれたか、三成笑止に存じ申す。

(お茶々と茫然として三成を見詰む。)

三成 とてかくても只今の物語は、三成が稚き頃の思ひ違ひ聞き損じ、誤りもあるべきに、萬一わが君の御耳にても入らむには、此三成が一期の浮沈、何卒阿濃川の水にお流しあり、何もかも御聞き棄てを。

(お茶々は怨恨と一種の希望とに心迷ひ、煩悶し居る。此時侍女一人、三成の家臣小川平左衛門を、上手よりともなひ出で来る。)

小川 わが君、これに御出でござりましたか。

三成 何故にかゝるところへは推參致した。

小川 増田左衛門尉長盛どのより火急の御書面。

三成 何事か心元ない。姫君御免。

（開封して讀み行く一句毎に驚く心。讀み畢つて思案の後）

三成 それがしが御勸めも、未だに御承引なかりしこそ互ひの幸ひ、少々取急ぐ次第もござりますれば、

これにて御暇賜はる様御願ひ申し上げます。

お茶々 手の裏かへすそちの狼狽、どの様な事が起つたのぢや。

三成 申上ぐべき筋ならねど、申上げぬも心苦しい。實は北の政所には、わが君が此度の御執心、いつ

しか耳に入れられて、一方ならぬ御嫉妬沙汰、その儘に棄て置いては、如何なる珍事の起らんも測り難し、それ故御承引の有無に拘らず此方より御辭退申上げ、匆々に歸洛させよと奉行たちより此急使、勝手ながらこれにて御暇を賜はりたう存じまする。

お茶々 して秀吉どのはわらはに未練が無いといふのか。

三成 その儀はしかと分りませねど、あれ程までに深くも思ひ込ませられし我君、さう容易う思ひ切る

る、筈とてはござりませぬ。なれども姫君の御輿入りが御家の亂れのもと、あつては、遮つてもお止め申す外はござりませぬ。

お茶々 愚かしい事は云はぬものぢや。かawaii女一人の爲め、豊臣の家が亂れる。ハ、ハ、ハ、豊臣の家と

いふはその様に根ざしの浅い、脆いものか。

三成

譬喩に引かんも無禮ながら、唐土には姐妃褒姒のためしもあり、本朝にもその先蹤は少なからず、先刻の御疑ひをこのまゝに、重なる恨みを胸にいだかれ、怖ろしき復讐の邪念を戀につゝんで、豊臣家へ御興入あらせられては、御家の禍亂はまのあたり、況して君臣親子の間にも心の許せぬ今の時節、姫君に心を合はせ野心を逞うするものにも現はれなば、關白殿下が心をくだき骨をけつて、わづかに治めし此天下も、忽ち動亂なさんも知れず、思へば三成が今日の使命は油を負ふて火を覚むるにも似たる危さ。姫君、御免。

(三成立かゝる、お茶々呼止め)

お茶々

そちや、其野心とやらを腹の底に潛めては居ぬといふか。

三成

(わざと情なげに) こは口惜き御語かな。三成こそは先刻も申上げたる身の上より、今日迄の御引立。皆是殿下の高恩と片時たりとて忠義を忘れし事なきに、野心などゝは心外千萬。

お茶々

さらば豊臣の家には、天下を望む英雄は一人も無いといふか。

三成

わが君既に御身づから、器量次第運次第、天下を握る手本をば示されたれば、心の底には刃を磨ぎ、時運の到來待構へ居らむもの、皆無とは存ぜねど、君の恩澤しければ、流石に然る不所存を表へあらはすものとはござりませぬ。

お茶々

恰度そちの様にな。

三成

これは又迷惑千萬、只今も申上げたる如く……

お茶々

(笑つて) 轉却ぢや、左様むきにならないでもよい。もう行け。

三成

はゝあ。

お茶々

(下手へ立去る。お茶々は一種の野心胸中に横溢して、三成を呼戻さんとすれど聊か躊躇の色あり。此時侍女一人入来る。)

三成を呼戻せ。

三成

(侍女下手へ立去る。三成又出で来る。)

何か御用にごさりまするか。

お茶々

思ひ浮べた仔細もある。妾は聚樂へ行くであらう。

三成

そりや俄かに思し變へられて。

お茶々

おう。

三成

折角の仰せながら、わが君を恨ませらるゝ姫君の先刻のお言、剩へ北の政所の思召もある上は、

一先歸洛致した上……

お茶々

そちはたゞ妾を迎取つて歸ればよいのぢや。それが秀吉どのよりの使ひの趣きであつた筈ぢや。

淀君と三成

三 成

とは云へ……

お茶々

そちたちの爲めに行くのでは無い、關白殿下の爲めに行くのぢや。

三 成

けに、此書面はわが君の御存じなき私の消息……さらば御伴致し申さう。

お茶々

それにしても妾は、贈正三位右大臣織田信長公の姪の茶々ぢや。行列其他もその格式にて。

三 成

いや、それにては畏れ多し。性急なる關白殿下の御下命とて、姫君の御召物取り揃へて持參致し

ました。すべては關白太政大臣の北の臺。

お茶々

何、關白の北の臺。

三 成

此春新たに造營ありし淀の御城を姫君の御殿として、御名も淀君と申し奉らむ殿下の御思召。

お茶々

そりや何から何まで其様に。

三 成

(家臣小川平左衛門に)姫君のお召物直ちに御居間へ持參致せ。

小 川

はゝあ。

三 成

姫君にも御召換を……

お茶々

さらば後に逢はうぞ。

(侍女に目配し、先に立たしめ、橋を渡つて奥へ入る。小川もあとより續いて奥へ入る。上手より信重出て来る。)

信 重

萬事はあれにて洩れなく聞いた。活殺自在のおんみの辯舌、信重たゞ／＼感服致した。それにしても、執念ぶかく、意地強く、負け嫌ひのあの茶々どの、おんみのおだてに乗せられて、關白殿下を仇敵と怨まんには、如何なる珍事の起らむも測りがたし。其期に及び何とせられむ御思召ぢや。

三 成

杞人は天の墜つるを憂ひしとか。それにも劣らぬ織田殿が苦勞性。草履をつかみしその手をもつて、天下を自在に丸め込んだるわが君なれば、たかゞ女性の一人二人、如何なる悍馬も一年ならぬに、心のまゝに乗りこなされん。御氣つかひは御無用ぢや。

信 重

それ聞いて安堵致した、さらば石田殿には彼方へ御出で、龜末ながらも饒けの一盞……

三 成

先刻より姫君の御相手致し、咽喉の渴きを覺えてまるつた。さらば御雜作に預かり申さう。

信 重

御案内申す。

（兩人上手へ去る。舞臺はしづかに上手へ廻る。）

舞臺は中足の二重の屋體、高雅なる建築、すべてお茶々の居間の心。上手よき處に經机。その上に位牌。香爐などを供ふ。その側には姥口の釜、大國の茶入などを置く。

お茶々は侍女たちに裝束をつけさせ居る。

終りに近づく頃妹お發正面襖の中より出で來りて驚く。）

お 發

やあ、姉上には思ひもかけぬ其御姿。先刻の御語とは打つて違ふて。

淀君と三成

お茶々

その不審はことほりぢや。妾はこれより豊臣秀吉公の許に輿入して、御臺處となる心ぢや。

お發

あれ程に嫌ふて居られた姉上が、いそくと樂しげに、剃ると云はれた黒髪も、濡羽の色の艶を増し、墨染衣にひきかえて、目さへ綾なる五衣。これにも深いわけがあらう、打明けて下さりませ。

お茶々

おう、いふて聞かさう。(侍女たちに向ひ)、そちたちは暫らく遠慮しや。

(侍女等敬禮して去る。)

お茶々

(經机の前に坐し) お發どの、こゝへ。(自分の側にすわらせ、位牌に香を炊き) 南無德勝院殿天英宗清大居士、俗名淺井備前守長政公、並びに自性院殿松月宗貞大禪尼、俗名淺井お市の方、遣れ佛の娘お茶々、今日只今、父上の御最期の御有様を石田治部少輔三成と申すものより承はり、悲憤の炎に胸を焚かれ、復讐の念止みがたく、御兩親が修羅の妄執晴らし奉らんその爲めに、此五體をば犠牲とし、此魂ひを血潮に染め、五體は豊臣の家に投げ棄てゝも、魂ひは永久に怨敵となり、あの家のあらん限り呪ふて呪つて呪ひ申さむ。

お發

(烈しく驚いて) 姉上、その様な恐ろしい事を思ひ立たれうより、矢張先刻の誓ひの通り、松雪尼の導きにて穢れた浮世を棄てませう。

お茶々

此姉の心には亡き父上の言が俄かに力つよう焚えて來た。そちはそちの道を行きや。妾はわらはの道を行く。(姥口の釜をとり出し) これはそなたへの記念ぢや。此大國の茶入と御位牌とは姉が肌身

に添えてもつて行く。これ何故泣きやる。姉が一生の出世の門出、不吉の涙は見せてたもるな。

(お茶々は強く云ひながら、おのれも顔を背向ける。)

お發
はえ。

(云ひながらも泣く。此時信包と信重とは土器、銚子、熨斗毘布などを女中にもたせ入り来る。)

信包

明日よりは當家の運命、如何になり行く事やらんと、安き心もなかりしに、茶々どの、芳志により此皺腹一つ拾ひ申した。

信重

忍びがたきを忍ばれし御身の苦心、信重たゞ御察し申す。

お茶々

此上は妹の身の上、叔父上御願ひ申しまする。

信包

それはいふまでもない事ぢや。それにつけても心ばかりの身の喜び。

鳴海の前

何はなくとも祝ひの杯。

お茶々

忝けなう存じまする。

三成

(お茶々盞を取る。お發酌をする。此時上手より石田三成姿を改め、家臣四五人を引つれ出て来る。)

お茶々

追々時刻も移りますれば、御臺様には早や御立ち。

(お茶々縁側に出づ。)

淀君と三成

三成

それお乗物を。

(家臣乗輿をもち来る。お茶々一同に挨拶して乗る。家臣たちは手がきにする。一同送つて出づ。舞臺しづかにもとへ廻ると、家臣一同それらの装束して蹲まり居る。乗輿よろしきあたりへ来る時、松雪尼悄然として出で來り、輿の裡なるお茶々の姿を見て驚く。)

松雪尼

あなたは姫君。

お茶々

おゝ、ばゝか。(笑つて) 妾は俄かに心が變つた。此世が急に戀しくなつた。(輿は恰度水の上に来る。お茶々水鏡を見て) これからは此黒髪の一筋たりとも、此身には大事な寶ちや。日本國はおろか、大明國の國王でも、見ん事此一筋で繋ぎとめて見せうぞよ。ばゝ、そちが四天王寺へ行つてくれたばかりで、妾の運命がすっかり變つた。やんがて妾の願ひの成就する時が來たら、そちにも一萬石の寄進をせうぞ。(云ひ終つてからゝと笑ひ、三成に目くばせする。)

三成

(立上つて) おん立ち!

(一同立上る。輿を昇上る。夕風一陣、梧桐はらゝと散る。)

幕

大正十四年二月一日印刷
 大正十五年八月一日再版
 大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
 第三卷



著者
 發行者
 印刷者
 印刷所

(非賣品)

松居翁
 高安月
 山崎紫
 伊原青
 岡鬼太
 郎園紅

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎
 東京市下谷區二長町一番地
 守岡功

東京市下谷區二長町一番地
 凸版印刷株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二一八八番
 振替東京五二二九八番